
K-ON × カリオストロの城

サッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K - O N × カリオストロの城

【Nコード】

N 3 8 7 8 Z

【作者名】

サッキー

【あらすじ】

けいおんをルパン三世カリオストロの城風にしてみました。上手く出来るかわかりませんが、応援よろしく願います。

第一話（前書き）

けいおん：ルパン三世カリオストロの城バージョンです。

私は作者ではなく、弟です。知っている方もいますが、現在サツキというネームでやている私の兄は、入院中です。一つの作品を絶対に自分の手で書きたいと言っています。し

かし、待たすのも悪いので、もしも、平沢唯の性格が、あの消失の人みたいだったらの世界

が終わった後に、書く予定である、この作品を掲示します。兄がノートに書き留めていたので、代わりに打って欲しいと言われたからです。

現在、兄は体も良くなって回復しています。しかし、まだ入院は続きます。皆さん、もうしばらくお待ちください。

第一話

某国 深夜の国営カジノにて

空を闇で包みこんでいる最中に、屋上で怪しげに動く影が二つ。

??「おい、準備はいいか？」

??「うん、オッケーだよ。」

??「おっし！降ろすぜ。」

ロープに大きな袋を結びつけ、ゆっくり降下して行く。その袋から札束がはみ出していた。
地面に着地しようとした時だった。

ジリリリリリリリリ

眠りを妨げるぐらいの警報が響きカジノの電灯が点灯した。

??「やっべ！逃げるぞ唯！」

??「あいよりっちゃん！」

二人は大金が入った袋を担ぎ走り出した。二人の前にいくつものバリケードが敷かれていた……だが二人は

律唯「とおーーーーー！」

飛び越えた……その次も

律唯「とおーーーーー！」

また次も

律唯「とおーーーーー！」

飛び越え、自分達の愛車であるフィアット500に金を押しこみ乗り込んだ。

唯「りっちゃん早く早く！警備員が達が来たよ！」

律「分かってるって！」

律はエンジンを掛け、猛スピードで走りだした。

バキュン、バキュン

律「うお！撃つて来やがった！？」

唯「必死だね。」

律「ああ…でも。」

唯「クフフフ。」

二人は不敵に笑った。なぜなら……

警備員達は追いかけようと次々と、車に乗り込みエンジンをかけるが

ブ…………ドガ…………ン！！

発進させるとタイヤが取れたり、真っ二つに割れた。二人は予め、車を壊していた。

そして一台の車のボンネットの裏に、律の似顔で

『く苦労さん』

と書いてあった。

律唯「ハハハハハハハハ！」

高速道路を走行している一台の車に、ギツシリと金が積み込まれていた。完全に二人は金に埋もれている状態だった。

律「50億はくだらねえぜ。」

唯「アイスいくつ買えるかな？」

律「アイスで計算するなよ。」

唯「まあまありっちゃん。お札のシャワーだよそれーーーーー！」

唯は律に金を投げ込む

律「バカ止めろ！」

唯「いいじゃんいいじゃん。」

律「まあいいや。こんなにあつたら笑いが止まらねえぜ。ハハハハ」

唯「ハハハハ。」

律「ハハハハ……ん？」

律は札束をジツと見ると違和感を感じ、スピードを落とした。

唯「どうじたのりっちゃん？」

律「捨ってちまおう。」

唯「ええ！？」

律「コイツは、偽モンだよ。よく出来ているけどな。」

唯「コレが？…まさか…国营カジノの大金庫から頂いたんだよ。」

律「ゴート札だよ。」

唯「ゴート札？」

律「幻と言われている偽札さ。国营カジノまでに、出回っていたとはな」

律はニヤツと笑い

律「唯。次の獲物が決まったぜ。前祝いにペア　とやろっぜ！」

律は屋根開き

律「そりゃ！」

次に唯も

唯「えーい！」

運転席のドアも開き、金は空へ舞って行った。

空を舞って行く金はまるで…この世の汚さを表しているような光景だった。

偽札とも知らず、一体何人の者が、取り合つのであろうか

律と唯はそう思いながら目的地を目指す。

第二話

唯「りっちゃん、もうスグで国境だよ。」

律「よし変装するか。」

律はカチューシャを外して髪を下ろし、サングラスを掛けた。

唯は服に空気を入れ、太った体系になった。更に右頬に付けボクロを付け、メガネを掛けた。

律「よし行こう。」

唯「く、苦しい…。」

律「我慢しろ。」

空気の入れ過ぎか、胸を圧迫していた。

律「取り合えず、平然を装えよ。」

唯「うん。」

国境前で車を止める。

警官「パスポートを」

律は2つのパスポートを警官に渡す。（モチロン偽造）

警官はパスポートの写真と見比べる。唯の方もチラッと見る

警官「なんか…苦しそうなんですが…大丈夫ですか？」

平然と装えと言っていたにもかかわらず、唯は苦しそうな顔だった。

律「あ、イヤ…コイツ、乗り物酔いしちゃったんですよ。」

唯「そ、そう…です。」

警官「だ、大丈夫ですか？」

唯「だ、大丈夫…夫です。」

警官「そうですか。少し、外の空気とか吸わせて、休ませて下さいよ。」

律「はいそうします。」

パスポートを返して貰い、国境を潜る

律「唯もついいぞ。」

律のお許しが出たと同時に、服に穴を開け空気を抜いた。

唯「ああ…苦しかった。」

律「ヒヤヒヤしたぞ。」

唯「だって本当に苦しかったんだもん。」

律「あーあーご苦労さん。」

律も運転をしながら変装を解いた。

唯「ここが、カリオストロ公国？あまり聞かない国だね。」

律「総人口は3000人。世界一小さい加盟国だ。ゴート札の震源地としている。ゴート札のブラックホールてな。」

唯「ブラックホール？」

律「ちよっかいを出して、戻ってきた奴は誰もいねえってよ。」

唯「怖いね。怖いから、キャンディー舐めます。」

唯はポケットから、棒付きキャンディーを取り出して口に銜え、舐め始める。それから、暫く車を走らせていると

パン

律「うわ！」

唯「な、何！？」

音と共に、車のバランスが崩れた。律は冷静にスピードを緩め、脇道に車を停車した。

律「あちゃパンクだ。」

後ろの左タイヤがパンクしていた。

律「おい。」

唯「うん。」

律「ジャン！」

唯「ケン！」

律・唯「「ポン！」」

律「グー」

唯「チヨキ」

律「にひひひ。勝利のグーだぜ。」

唯「それ、私の決め台詞。」

律「お前の決め台詞は、頂いた。」

唯「もう仲間の物まで盗まないでよ!」

律「はいはい。悪かった悪かった。はい、作業始め。」

唯「はい。」

唯はタイヤを取り出し、作業にかかった。その間、律は空を見上げると、小鳥達が戯れていた。

律「平和だね。」

そこへ

ブオオオオオオオオオオオオ

律「ん?」

物凄いスピードで車が迫って来て

キュウウウキイイイイイン

それなりの年頃の女の子を乗せた車が通り過ぎて言った。そしてその後ろに黒服に帽子にサングラスと、とても警察とは呼べない人達を乗せた車も通り過ぎて行った。

唯「何だろ、あれ？」

律「乗れ！」

唯「えっちょっと、りっちゃん！」

律が車に乗り込むと、ハンドルの近くにある緊急加速装置と書かれているボタンを押した。

ブブブブウウウゴウウウウウ

明らかに、車とは思えない音が響いた。

唯「わぁ！待ってよ！」

唯も慌てて車に乗り込み

「発進！」

ゴオオオオオオオオ

普段10馬力しかない車が、今の間だけはF1カー並のスピードであつた。

第三話

山道を凄まじいスピードで疾走する二台……いや三台

唯「どっちにつくの？」

律「女！」

唯「やっぱり」

唯は軽口を叩きながらもシリンダーを回転させてワクワクした表情になる

そして律は前の二台に迫るためにガードレールギリギリのドリフトやハンドルさばきで徐々に距離を詰めていった時だった。

ドガガガ

黒服の奴らが乗っている車は、自ら体当たりして、女性が乗っている車をガードレールに挟んだ。火花が激しく散る。

律「やべ！」

唯「任せて！」

唯は車の屋根を開き立ち上がり、銃を構えた。

唯「りっちゃん、もう少し近づいて！」

律「おう。」

唯が射程距離に男たちの車を捉えると

バキューン、バキューン

パンクさせようと、タイヤを狙ったが

キ
ン、キ
ン

弾かれた。

唯「アレ？何で？」

律「くっ、ただの車じゃ無さそうだ。」

前方の車は律たちの車に気づいたのか、男たちはこっちに手榴弾を
転がしてくる

唯「りっちゃん！左、左！」

律「分かってる！」

ドゴーーーーン

その手榴弾を見事なハンドルさばきで回避する、男たちはまた手榴弾を転がしてくる

唯「今度は右、イヤ、左：イヤみ、右？」

律「どっちなんだよ！？」

ドゴーーーーン

よけ切れず爆発に巻き込まれた。

唯「熱っ！！」

辛うじて、フロントガラスにヒビが入る程度で済んだ。

律「ニャローアッタマに来た！」

唯「でも、面白くなって来たよ。」

律は肘で、唯は銃をハンマー代わりにして、フロントガラスを割った。

律「唯行くぞ！」

唯「おおー！りっちゃん！」

律「うりゃあああああー！！！」

律はハンドルを右に切り、崖の斜面に車を走らせる

律「ぐおお！直で風圧が！」

言いきるや否や斜面に登りきり藪の中に入る

唯「イテテテ！」

唯には枝が何本も当たり

律「イテ！な、なんなんだ！？」

律の頭の上にはスズメの巣が乗っかる。しかし 律はそれに臆することなくアクセルをさらに踏む

律「取った！」

藪を抜けると律が大声で叫ぶ。その崖の下にはあの女性の車と男たちの車がかみ合っている形になっていた。すかさず、律はその二台の前に躍り出る

唯「今度は、ただの弾じゃないよ！」

そして前方左のタイヤに狙いを定め撃つ

ガアアアアン！

バシユ！キイイイイ！ドガーーン！！

タイヤをひとつ失った車はそのままバランスを取れなくなり蛇行した拳句

斜面に追突した

唯「やった！」

唯は両手でガッツポーズを作り、律は爆発したのを確認すると車を元に戻す

第4話

プー、プー、プー
プー、プー、プー

女性が乗っている車にクラクションを鳴らす律。

しかし返事がない。律は車の中を覗くように見ると、少女は気絶していた。

律「気絶してる!」

その少女を乗せた車はガードレールにぶつかったりしながらとまる気配がない

唯「りっちゃん!あのままじゃバラバラになっちゃうよ!」

律「ハンドル頼む!」

唯「えっ、ちよつと!?!」

律はそう言つと屋根に登り、少女の車に近づき

律「とう！」

少女の車に飛び移る。そして少女を抱えると、前方には『この先急カーブに注意』という看板とローラー車が目に入る。それを見ると律は、ブレーキをかけるがそのまま

ズゴーーーーーン

体当たりをしてしまう。その衝撃で律の顔にボンネットが当たり、更にハンドルやミラーまで当たる

律「ぶはっ！・・・うーん」

意識が飛びかけそうになったが前を見ると車はそのまま崖下に落ちていく。

律「うわあああああー！」

そういうや袖からワイヤーを取り出し、岩肌にある枯れた木にそれを投げ絡み付ける

律「ひくく危ねえ。」

そして少女の顔を覗き見ると今まで見えなかったが、きれいな黒髪のツインテールで端正な顔立ちの花嫁姿の少女が目に入る

その少女がわずかに身じろぎをする

少女「う・・・うくん」

律「えっと・・・災難だったな・・・花嫁さん？」

少女は目を開いて律の顔を見る。

すると

少女「きゃくくく！離すです！」

いきなり少女が暴れだす

律「うわ！バカ！今暴れるな！下を見ろ！下を！」

少女が律の言葉を聞き、下を見ると下には断崖絶壁と海が広がっていた。少女は青ざめた顔をする。

少女「お、降ろして下さい!」

律「大人しくしているよ。」

少女はそれを聞くとおとなしくなり頷く

律「わりいが、少し待っているよ。」

律はベルトの金具をあけるとハンドルがあり、それをまわし地面に降り始める

・・・しかし

ミシミシ

バキッ!

枯れた木が折れ二人は落下する

少女「うわあああ！」

律「うおおお！」

律は地面に接触する前に、少女を上にし少女を守る体制になる

ドスウウン！！

地面に落ち律は、全身を強く打ち付けるが

「いたた・・・」

無事だった……が

ゴオオオン！

バキッ！

ドカッ！

律に目がけて、先ほどの枯れた木が頭に当たる。これにも律はたまらず

律「うゝん・・・」

そのまま気絶する

そこに

少女「イタタタ・・・」

先ほどの少女が目を覚ますが、律を見ると後ろに下がる

「あの…もしもし…もしもし…大丈夫ですか！？」

反応がない

少女「どうしよう・・・死んじゃったのかな？」

少女は海に駆け寄り、グローブを脱ぐと海水に含ませる、海水を含ませると律に駆け寄り顔を拭ってやる。

律「う・・・うゝん」

律が身じろぐのを見て少女は呼びかける

少女「あの・・・しっかりして下さい！」

ポオオオオオオ

後ろから船の音がしたため振り返る

少女「ゴメンなさい。」

そのグローブを律の額に置くと、少女はそのまま林の中に入る
その船に乗っているのは先ほどと同じ服装をした男たちであった

？「りっちゃん……っしか……して……。」

誰かが呼んでいる

？「しょう……死……ったの……な？……どう……う……。」

誰かが近くにいる

？「だよ……イヤ……だ。」

そうだ、あの子は！？

バチン

唯が律の頬を叩く

唯「りっちゃん！死んじゃダメ！」

バチ ン、バチ ン

唯「お願い！三途の川から戻って来て！」

バチ ン、バチ ン、バチ ン

唯「起きてよ！りっ——————ちゃん——！」

律「や、やり過ぎ……。」

唯「あっりっちゃん！」

唯は、律を抱きしめた。

唯「良かった。りっちゃん、死んじゃったのかと思ったよ。」

律「一瞬死にかけたよ。」

思い出したように律に尋ねる。

「おい！あの花嫁は？」

唯は海の方に指を差す

律はそつちを見ると、少女が連れて行かれる所だった。

律「くっ、くそ・・・？」

律は悔しさでグローブを握り締めると違和感がある。グローブを広げるとそれが転がり落ちてくる。ある物が律の手の平にあった。

唯「それは指輪？しかも山羊のような装飾が施されてる。」

律「……。」

唯「りっちゃん？」

律「……。」

唯「……その指輪がどうかしたの？」

唯は律の顔を覗き見ると、真剣な表情が目に入った。

唯「りっちゃん。」

律「……。」

律は自分の車に足を向ける

唯「あ、ちょっと、りっちゃん!？」

唯の呼びかけにも答えなかった。律の顔はあることを思い出した顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3878z/>

K-ON×カリオストロの城

2011年12月25日17時47分発行